

『近代艶隠者』の思想的背景

フレデリック・ジラル

この度、東洋大学の東洋学研究所にお招きいただき誠に光栄に思い、また、以前この大学に來たことを懐かしく思います。特に、東洋学研究所の伊吹敦先生、谷地快一先生、大鹿勝之先生に深く御礼申し上げます。今回の発表はしばらく前にフランスで、出版社主催での井原西鶴著作集の翻訳計画の一つとして、フランス国立研究所の日本文化研究班の共同計画の枠で企画した研究成果¹であることを、あらかじめ申し上げておかなければいけないと思います。その研究計画は完成しておりませんが、それに関連して私が宗教思想に関わる作品を選び、それを田中久夫氏および神保五弥氏と共に講読した個人の研究成果の一部が今回の発表になります。発表内容については、文学の専門家ではありませんので、ご教示を頂ければ幸いに存じます。

I 『近代艶隠者』テキストの性質

一 隠者のこと

隠遁といえば、世俗世間と縁を切って、自分に相応しい世界を作り、純粋な宗教生活に専心することを意味しています。そういう世界は様々でありますから、一言でまとめられません。

まず、決まった社会の規則で一つの職業生活を終えた人物、氏長者が出家して沙弥や入道になり、隠遁生活に入るという意味があります。あるいは結婚している女性が、出家して比丘尼になります。これは、社会の習慣に従って隠遁する場合です。現在、東南アジアにそういう習慣が残っていますが、日本でも古代から行われています。

他方、出家して寺院、教団の中で修行している内に、更に隠遁するケースがありますが、この場合には、離れた庵に住むか、或いは巡礼をしたり、行脚したり、遊行したりするケースもあります。こうした隠遁は、誠実な発心に基いた隠遁といえますが、道元(1200-1253)は、徹底的に社会の職業、職位から離れた出家者こそ出家の中の隠遁という考えを発想して、それが本当の出家者であり、まことの隠遁者と考え、中世のはじめに宗教的改革を起こしました。

また、一向宗、浄土真宗の場合、妻帯は認められていますので、隠遁の意味は非僧非俗の身でありながら、隠遁風の生活を送るということでしょう。社会学的な習慣の意味と仏

1 *Aimables ermites de notre temps: récits composés par Sairo 西鷺軒, alias Kyōsen 橋泉, et préfacés par Ihara Saikaku 井原西鶴*, traduits et présentés par Frédéric Girard, Paris: École française d'Extrême-Orient, 2017.

教団と寺院において、隠遁することの意味は多彩で、場合によって重なることもあります。思想的には、道教の老荘思想の哲学理念も取り入れられて、隠遁することは市中に市中を蔵するといって、精神的な態度を意味していますから、必ずしも実際の社会を離れるということではありません。世俗的な物事から縁を切り、執着を断つことは、内面的なプロセスですので、実際社会の中で生活して職業を続けながら、市中で何のとりわれもない生活方法を実現するという理念であります。小（本格的でなく、物真似の）隠遁者は都市を離れて山に住みますが、大（本格的な）隠遁者は、都市の中に隠れていることを蔵（かく）しているのです。ここでいう蔵は客観的世間を内面化すると理解すればいいでしょう。普通の人間に見えますが、自分の心は隠遁しています。今回、扱っている作品は、そのような老荘思想を踏まえた、新しいタイプの隠者のことを言っています。前の時代と違って、中世末期の反乱の戦国時代から近世初期の鎖国、パクス徳川に現れた隠遁者のことを作者は考えていました。彼らは新しいタイプなので、艶と言う形容詞をつけて新術語の艶隠者と呼ばれます。今回は、その言葉が題目の中に含まれた作品を選んでいきます。

二 出版

貞享三年（1686）に刊行された、大阪の書肆河内屋善兵衛刊の『近代艶隠者』²という著作は、17世紀に生きた人物の伝記、随想、人生観の記録ですが、同時代に相当する18世紀のヨーロッパの思想・文学と比較してみるとどのような位置づけがなされるでしょうか。もちろん歴史的な背景が異なりますので、完全に一致するとは言えませんが、ジャンルとしては自由主義哲学（philosophie de libre-pensée）および哲学小説（roman philosophique）と呼ぶべきものです。国境を超えた世界観、人間の普遍性という広い見地から、類似が見つかるといっても、抽象的観念論に絶望しかけているヨーロッパの感覚主義、博学主義、相対主義の哲学、ヨーロッパにおける科学的合理思想と博学思想の発展に対し、人間関係の繊細さを重んじている日本の粹、数奇、艶の考え方には、思想的に距離があると言えます。今回は、紹介する著作『近代艶縁者』について、内面的な心理に中心が置かれていることに特色があることを論じてみます。

書肆河内屋善兵衛は、『近代艶縁者』と同じく1686年に『科註妙法蓮華経』³、1687年に西鶴筆の『西行撰集抄』⁴も出しています。作者については、本文・挿絵ともに、井原西鶴の自筆自画であるとされますが、西鶴の名と（松風軒??）井〔原〕門松壽という花押が示されている序文に「西鶴軒橋泉是を書残しぬ」とあり、西鶴の友人である西鶴仮託の西

2 テキストは、早稲田大学図書館所蔵本を用いた。以下、『近代艶隠者』からの引用は、（巻1の1）のように該当箇所を示す。また、以下文献の引用にあたっては字体、表記をあらためた。

3 田中秀樹「大阪本屋仲間の歴史（四）一元禄二十四人衆（下）一」、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第41号、岡山大学大学院社会文化科学研究科、2016年、（9）頁参照。

4 東洋大学図書館蔵の影印縮刷版自館製本を参照。

鶴作品か、あるいは西鶴仮託の西鷺の作品か、現在に至るまで、作者西鶴説あるいは西鷺説の議論が繰り返されています⁵。挿絵に関しては、『西行撰集抄』と田中玄順の『本朝列仙伝』⁶の挿絵とがぴったり同じであり、『好色一代男』の挿絵を描いている菱川師宣とその弟子の菱川友宣のスタイルであって、ひょっとしたら、本著の序文と同じ姿の観音菩薩をよく描いていることで知られている梅林軒風黒作の可能性があります。作者に関しては江戸時代から近代を経て数十年前まで、芸術評論家が躊躇（ためら）って判断できないまま、曖昧な状態が続いていましたので⁷、この著作の正確な性格もはっきりとわからず、位置づけが難しかったようであります。確かなことは、小説の中の見出しと巻毎の目次の見出しは多少の違いがあります。そして、中の見出しは明らかに西鷺の原作のままのものでしょう。巻毎の目次の見出しには原作にない一般読者の関心を引くためのものもあります。そちらは、出版の世界をよく知っていた西鶴の付け加えたものとしか考えられませんか。例えば、『近代艶隠者』巻一の目録にある「勇武の四隠」、「市中の風流男（やさおとこ）」、巻二の目録にある「世は捨売（すてうり）の棚」、「夢又夢の宿」、巻三の目録にある「袖に留木の昔」、「紅葉は心の広庭（ひろにわ）」など、特に巻三の目録で「難波の哥翁（うたおきな）」の上に、「和朝の風俗」とわざとつけられているのは、出版物がもっと売れるように、広告の看板のように、西鶴が考えだしたものでしょう⁸。

II 小説の系統

一 紀行物語

『近代艶隠者』は地方の生活を描いている点で、諸国話のスタイルに属しています。同時代の同じ系統の著作として、『西鶴諸国ばなし』（1685, 1）、『本朝隠逸伝』（1686, 11）、『懷硯』（1687, 3）、『西行撰集抄』（1687, 5）、『一目玉鉾』（1688, 1）、『新吉原つねつね草』（1688）は隠遁している人物の伝記と思想を描いています。特に、西鶴の弟子達が書いた『懷硯』の伴山と後の世代の『本朝法華傳』（1719）の行空法師の遊行している姿が本著作の主人公に類似しています。同じ『懷硯』は『近代艶隠者』から逸話を一つ切り抜いて付け加えられたことを考えますと⁹、西鶴文学において『近代艶隠者』は重要な位置を占めています。しかし、非道非俗の鴨長明（1140-1216）、そして西行（1118-1190）や

5 例えば、額原退蔵、暉峻康隆、野間光辰編『定本西鶴全集』第14巻、中央公論社、1953年、野間光辰の解説7-9頁、野間光辰『西鶴新新攷』、岩波書店、1981年、363-408頁「近代艶隠者の考察」を参照。

6 東洋大学図書館蔵『本朝列仙傳』（大坂 岡田三郎右衛門板行、貞享3（1686）年4巻4冊、23cm 和装 絵入）の影印縮刷版自館製本を参照。

7 上掲『西鶴新新攷』、366-372頁を参照。

8 森銑三『井原西鶴』（人物叢書）、吉川弘文館、1985年新装版、173頁には次のように述べられている。「『艶隠者』は西鶴自身に編輯に当たった。目次の面にも特別の趣向は凝らしてはいず、小見出しの下に、註記を二行に揃えた巻と、ただ一行だけを添えた巻と二通りになっているが、どの巻の目次の面も感じが清楚で悪くない」。小見出しの下に、註記を二行に揃えた巻は、例えば巻一の目録で㊦「市中の風流男」の下に「浅草の風人」と「芝の花作り」の二行が並び、ただ一行だけを添えた巻は、例えば巻三の目録で㊦「和朝の風俗」の下に一行「難波の哥翁」と添えられている。

9 上掲『井原西鶴』、217-219頁参照。

吉田兼好（1283? -1350?）を理想にしている西鷲は1686年に名古屋の俳友の下里のところで、『徒然草』を読んで講義しています¹⁰。隠遁者の伝記を書くために、臨済宗の虎関師錬（1278-1346）の『元亨釈書』（1322）、儒者の林羅山（1583-1657）の『本朝神社考』も参考になっています¹¹。『西鶴諸国ばなし』に底流する見方は、地理的にも職業的にも習俗的にも、人間が多様性を呈していても共通な本質を有しているということです。

西鷲達はおそらく中国のLiu Xiang 劉向（紀元前77-6）の『列仙傳』（888-898に日本輸入）¹²も知っていたことでしょう。日本の深草元政、林羅山、田中玄順の著作のほか、浄土真宗の浅井了意による女性の隠遁話の『本朝女鑑』（1661）、野間三竹（1608-1676）の『古今逸士傳』（1661）、羅山の息子の林讀耕齋（1624-1661）の『扶桑隱逸傳』（1664）、北村季吟（1625-1695）の『假名列女傳』も西鶴と同時代に隠遁文学作品として世に知られています。西鶴と西鷲は時代の流れに乗っていましたが、他の作者よりも才能が優れていましたので、今でもその作品が読まれています。

二 懺悔物語

『近代艶隠者』はジャンルとしては「懺悔物語」の系列にも属しています。というのは自分の人生の中に何が起こり、どういう風にその出来事を生き、体験したのかを語ることによって、人は自分の煩惱や束縛や葛藤から自由になって解脱できます。歴史的に、直接に結びつけることは論証し難いにしても、大きな思想の枠で見れば、日本の仏教教団で行われていた懺悔は個人と個人との間の内面的なコミュニケーションがなく、ただの外面的な儀式でありがちであったことと比べてみると、「懺悔物語」にはキリシタン時代のキリスト教の懺悔の方法の影響が考えられなくはありません。ロヨラの精神修練の特質はだれかそれを受け入れる相手即ち、神父を通じて神やイエスやマリアやヨセフや驢馬や牛などに対して直接に親しく、口で話された事を通じて自分の罪から解放されて自由になります。というのはジュール・ミシュレ（Jules Michelet, 1798-1874）¹³が言うように、イエズス会では儀式で使う書き言葉ではなく、全てが話し言葉で行われていますので、個人的になります。聖典はただ時々、特別な問題が出てくると、参考にされていますが、出発点にな

10 野間光辰『刪補 西鶴年譜考証』、中央公論社、1983年、296-298頁、貞享元年（1684）「八月二十八日、尾張鳴海下里寂照（知足）宛て書状を送り、年内に東下の予定あれば、それまで西鷲を鳴海に留めて世話するやう依頼す」。森川昭「西鶴第七書翰をめぐって」、『連歌俳諧研究』第79号、1990年、3頁、知足の日記天和四年（貞享元年）の記事「五月二日 曇ル昼過る雨降 如意寺にて徒然草講尺有」。

11 『近代艶隠者』巻5の4「軀の兄弟」に、野末の寂然たる寺に至ったことが記され、寺の名を問うとむかし平氏の流派小松三位の建てた寺であると言う、との箇所があるが、小松寺は安国寺の塔頭であった。安国寺は心地覚心（1207-1298）の開山であり、巻5の4の、寺の由来を聞いて「本覚の心主を清むるやらん」という箇所は、『元亨釈書』（大蔵吞碩 写、永禄元年 [1558]）巻6の覚心のことが念頭にあったものとみられる。『本朝神社考』との関連についていえば、巻4の3「富士郡の賢濃」における富士山の描写の「峯は白雲をかつひて」といった表現は、『本朝神社考』中巻の富士山の項（改造文庫本、昭和17年 [1942]、220頁）にある「此の山高きこと雲表を極めて幾丈と云ふことを知らず」という表現を参考しているようにみえる。

12 Traduction Max KALTENMARK, *Le Lie-sien tchouan*, (*Biographies légendaires des Immortels taoistes de l'antiquité*), Université de Paris, Publications du Centre d'études sinologiques de Pékin, Pékin, 1953.

13 *Précis de l'Histoire de France jusqu'à la Révolution*, 1833; *Des Jésuites*, 1843.

りません。懺悔のやり方は個人的な体験と思想を発展させる訓練であり、内面的な問題を解決する役割を果たしています。軍人と町人との境目にいたロヨラの世界は理想を省いて、現実を肯定する態度と繋がっています。ヨーロッパで人間の意識の革命を行ったのが、他ならぬロヨラの同朋達であるとミシュレは考えています。恰も禪宗で行われる師と弟子との間の入室とはほとんど変わりありません。生死大事の問題を解決したい弟子は師に自分の本来面目とは何かと問い、聖なる本尊をも含めて全てを捨てて葛藤の状態を表す問答体の公案を挙げて、本来本分の自己を発見し悟るのであります。「以心伝心」と「平常心是道」を唱えている禪宗では少しずつ寺院から市中の方へ説法の場所を変えています。後に話す鈴木正三はそのことを「自己變生」と呼んでいますし、幕府の命令を受けて十七世紀の半ばに天草の本場でキリシタンを論破していた正三自身も問答体の「懺悔物語」を作りました。彼は母のために『二人比丘尼』を書いていますそれが懺悔物語の伝統に位置づけられます。他にあげられるのは室町時代に遡る著作不明の『三人法師』、『三人懺悔冊子』は高野山での隠遁者の話を述べていますし、善光寺で隠遁した著者不明の『七人比丘尼』は1635年に刊行され、『四人比丘尼』、別名『花の情』は1708年に刊行されています。西鶴の著作の中で特に団水と西鷺筆『一代女』における懺悔の重要な位置を明らかにしているのが、専門家の間の説です¹⁴。

Ⅲ 『近代艶隠者』の文学形式——無我の旅僧の行脚——

一 三教一致のパターンと正三の自己變生

『近代艶隠者』巻1の2には、花葉の翁、土器の翁、朝覚の翁、二王の翁が登場します。二王の翁は誰を指しているかという点と鈴木正三（1579-1655）ですが、正三は徳川家康の家来の武士で功をなした恩寵として、寺領をもらって、曹洞宗の在家的な僧侶になり、幕府のためにオーソドックスな道德の説法をしています。正三は、自己を忘れることと只管打坐を唱える曹洞宗の祖師の道元の静寂主義と比べることができます。すなわち職人に、どの仕事も仏行であり、人々の所作の上において成仏されるべきである¹⁵と『万民徳用』で説き、「仏道修行は、仏像を手本にして修すべし。……ただ二王不動の像等に眼を著て、二王坐禅を作すべし」¹⁶と『驢鞍橋』の中で唱えています。さて、『近代艶隠者』巻1の2では、鈴木正三がモデルとなっている二王の翁は、三人の翁に向かって「未だ自己變生を明らむるにあらず」といいます。「自己變生」という言葉は正三の著作にも出ていませんし、他の仏教の著作にも知られていないようです。しかし、後述の通り、巻4の4に、唐作りの寺（相模国足柄郡の紹太寺。黄檗宗の鉄牛を中興開山とする）の和尚の言

14 暉峻康隆『好色物の世界：西鶴入門』（下）、NHK ブックス、日本放送出版協会、1979年、149-156頁、上掲『西鶴新新攻』、431-474頁。

15 鈴木鉄心編『鈴木正三道人全集』、山喜房仏書林、1967年再版、70頁。

16 同書、138頁。

葉に「己變生」という言葉が出てきますから、おそらく、西鷺自身の哲学用語である可能性が大きいです。意味としては、世界と社会は自分の次元にあわせて変えられないので、自分自身を変えて、新しく生まれ変わろう、新しい生活の仕方を受け入れるように努めなければいけないという意味です。西洋語の transfiguration に似ている言葉です。キリスト教の教義では、天における完璧な生活の仕方と形を表す言葉です。しかし、『近代艶隠者』においては、老荘思想の道教的な意味もありそうで、自分の親戚達が死んでも彼等はただ、形を変えただけなので、何も悲しいことはないし、全ての人間と生き物は生まれ変わりますから、無駄に気にする事は一つもないという哲学を表しています。道教的な意味で理解された仏教か、キリスト教の影響も考えられます。

二 道教、儒教、禅、国学の武士への戒め

上述の巻1の2の場面で、二王の翁は、幕府を支持しながらも、ちょっとしたつまらない指令に背いていた広島城の藩主福島正則（1561-1624）の家老であり、道教の代表者の福島丹波治重（生没年未詳）と目される土器の翁と、幕府側でありながら、大坂の陣の時に、英雄の態度を公にみせずして家康大將軍の不興を買い、儒教の代表者とされている石川丈山（1583-1672）がモデルになっている花葉の翁と、人間の感情を主張している国学者の代表者である朝覚の翁（細川幽斎かキリシタンの木下長嘯子）とを叱って批判しています。丈山も正則も治重も、もともと、徳川家康に忠実な武士でありましたが、あまりにも自己主張的な態度を見せたせいなのか、家康の嫉妬心が強すぎたのか、ただ家康の恐さなのか、或いは不信感を帯びていたせいなのか、丈山は執居させられました。しかし、おかげで彼は詩仙堂を美学的に作りました。ただ、妙心寺の禅宗の僧侶と交流していたため、林羅山の批判も受けていました。また、正則と治重は流罪に処されています。上述の場面では、儒教の代表者の丈山、道教の代表者の治重、国学の代表者の朝覚の翁が仏教を代表している正三のもとで審判されている場面が展開されています。これは空海が開始した三教一致の文学の延長線に位置づけられます。空海においては、おそらく道教は今でいう神道と同視されていたようです。この作品の中で、正三の態度はどう考えても、著者は幕府側であったかのように構成する役割をもち、文学著作の検閲機関の前に、この作品が幕府側でないもの、特に反乱を起こすような反逆者を弁護する著作ではないことを見せようとしたと考えられます。

三 無我の旅僧の遍歴

『近代艶隠者』序文には、西鷺が五年ぶりに懐かしく難波の歌人と名乗っている西鶴に再会したと述べていますが、おそらく、五年ではなくて、二、三年くらいの旅であったでしょう。五年といいますと、昔は、大変長い間、久しぶり、ほとんどフランス語の

lustres (lustre はもともと5年間という意味で、その意味から展開されて、永遠、永久、詳しくは5年間が何回も繰り返されている永い時間という意味になります) に当たる言い方だったでしょう。事実、この作品は、西鷺が日本中を、大阪を出発点として、南から北まで回って旅行するという物語のかたちを取っています。初めの二巻は洞窟の中の物語者を描いています。第一巻目は京都、江戸、陸奥の白川、摂津住吉、また、土佐のことに言及して江戸の市ヶ谷へ戻る。第二巻目は京都、江戸、京都で終わるが、江戸と福岡へ行く普化宗の虚無僧の話で終わります。第三巻目は洞窟を出て無我の旅僧が生存者を尋ねます。京都の嵯峨や高尾について話しながら、長崎を思わせて、そして奈良と難波の歌翁の面会で終わります。ここには西鶴自身をイメージさせるものがあり、一種の終点が見られます。第四巻目は琵琶湖から、幕府の領地の名古屋をへて、幕府に反抗している地域の富士、小田原、江戸の永代島に到着します。第五巻目は武蔵国で西鷺の記憶に基づく話で九州の筑前と筑後、長門、小倉、下関から本土へ戻って広島、備後の鞆、赤穂に隣接している備前で旅行が終わりますが、第五巻の旅行の記録が一番詳しく述べられ、また、筆者の記憶とされているので、若い時からよく知っている備後か備前は西鷺の故郷と推測されます。旅行の到着点である備前岡山の臨濟宗妙心寺派の国清寺に友人がいると書いていますので昔からの親しみのあるところですね。一説では、巻1の1で「御神に逢奉る」という観音は故郷の備後の磐台寺の阿伏兎観音であるという推測¹⁷があります。西鷺の旅行に順路や順番はありませんが、一番実録に見える第三巻と第四巻において京都を出発点にして奈良、大阪、また、京都の側にある琵琶湖から名古屋をへて江戸まで行くのは最初、西鶴と計画した旅行の経路に近いようです。何時であったのかはわかりませんが、実際に旅したのは第五巻の北九州と瀬戸内海の船のルートで、また第一巻と第二巻に出ている江戸と京都以外、北の国の白川、四国の土佐はただ想像上の話かもしれません。ある意味では、西鶴が出来なかった日本巡りは、西鷺がその代わりに行なっています。

四 尋ね人の面影

西鷺が訪ねに行っている人物は物語者二十人、存命者十七人、全部で三十七人います。細かい分析¹⁸によりますと、第四巻の第二と第三節の話の間に、地理的に空白があって、それが西鶴の『懷硯』の第二巻、第四節の話と西鷺の文章のスタイルにぴったり当てはまりますので、西鶴が自分で、『近代艶隠者』からの話を『懷硯』に移動した形跡があります。『近代艶隠者』をモデルにした田中玄順は三十八人の伝記を述べています。三十六人は木下長嘯子(1569-1649)の和歌の歌人の数で、それに従った石川丈山の漢詩の詩人の数でもあります。三十七人という数是大江匡房(1041-1111)の『本朝神仙伝』の数と同

17 上掲『西鶴新新攷』、379-380頁。

18 上掲『井原西鶴』、217-219頁。

じですので、意図的に西鶴がひとつを減らしたかもしれませんが、デュエットもありますから、元の数はいくつでも可能性もあります。

要するに、半分位は、現在生きている人物で、半分位はもはやいなくなっている人物ですが、皆、十七世紀に生きた人物ですから、徳川幕府の成立の時代を生きており、近世、物語が書かれた時代の人物とされています。西鶴が序文でいうように、人間の本質は同じでありながら、人間ほど替わったものはないと言って、一方では、昔、高い位の人物が、今、墮落された位置におり、他方では前に貧乏生活をしていた人物は、今、苦勞して仕事をした結果、立派で、お金持ちになっているというような物語の連続です。また、自足を知っている人物が、余分にお金を貰えば、他人に施し、愛他的な行動をしているケースもみられます。このような人物描写から、本書は当時の社会生活、経済的生活を知る上で貴重な歴史的な書物であるということが出来ます。思想的には、道教、佛教、儒教を哲学的に参考しているところが多いです。社会的な傾向として、関ヶ原の戦い、大坂の陣の時に、徳川家側ではない人物、要するに、豊臣秀頼、石田三成側であった人々の方が圧倒的に多く現れていますから、西鶴とその周りの人たちはむしろ、徳川政府に反抗している人々であったことを傍証しています。それを表すのが西鶴の書簡や当時の知識人の老荘思想への関心であり、また、黄檗宗、禅宗、陽明学の思想的傾向であります。著者自身は岡山県の備後出身の人ですが、備後は赤穂事件を起こした地方の近くですから、西鶴の著作の全体的な傾向を表しているといえないでしょうか。

五 西鶴の教養

日本中を行脚するはずであった西鶴は大阪を出発して、名古屋にたどり着き、和歌と連歌の共通の友人と、パトロンであるお酒の問屋の下里寂照知足（1640-1704）のところで西鶴を待ちます。今の大学の先生よろしく、執筆と出版作業の仕事に忙しくて西鶴が来なかったため、西鶴は一人で出発することになります。このことに関しては西鶴と西鶴と下里との間の書簡も、それから、下里の日記も僅かではありますが、幸いに残っていますので事情が割とよく分かります。特筆すべきなのが、下里の日記のお陰でわかりますが、西鶴が何回も大阪と名古屋との間を往復している目的の一つは、『莊子』とりわけ「斉物論」について講義を行っていたということです。これは、西鶴や芭蕉や西山談義のグループの詩人たちが、老荘思想を教養にしているということでもあります。芭蕉の書簡もそのことを裏付けていますが、注目したいのが当時、老荘思想はある程度、中江藤樹の人間の兄弟平等の陽明学と同じように、幕府にとって危険で敬遠すべき思想でありました。要するに、井原西鶴とその周りの文人、知識人、詩人達は、幕府から距離を置いて文芸作品に没頭していたのです。その中で、西鶴はどういう人であったのかは、ほとんどわかりませんが、ただ備後（か備前か）出身であったことを推測できることとして、磬台寺の同時代の

住職の一人である雪窗陽泉の名前から橋泉という呼び名をとったのではないか¹⁹といわれています。また黄檗宗の僧侶でありましたが、得度、受戒のことなどは今のところ、一切推測できません。しかし、下里知足を通じて黄檗宗の有名な鉄眼道光（1630-1682）や高泉性激（1633-1695）と知り会えたので、高泉から橋泉と名乗った可能性もあります。彼の元々の宗教思想の系統、家族、職業の由来などに関しては上述の通り述べがたい次第です。長崎の俳諧人の船山橋泉（生没年未詳）の説もありますが論証しにくいです。ただ言える事は、遅くとも1680年に行われた俳諧マラソンである大矢数でお互いに知り合いになって以来、西鷺は西鶴の和歌と文学の親友であり、彼の文体を正確に分析した森銚三が示したように²⁰、西鶴の何冊かの著作の協力者であります。その業績だけで、江戸時代の文学においても見逃せない重要な人物です。

諸国をめぐり、隠逸の人々を訪ね、その境涯すなわち人生の悟りと哲学を書き残した西鷺の著作は、文学的な形としてはナレーターが名前もない人物でその上、僧侶の姿を呈しています。西鶴が目次に付した見出しを見れば無我の旅僧という形容的名詞で呼ばれていますが、誰でもない、行く方知らずの行脚の法師、挿絵を見れば、円相の中に描かれている姿ですので、唐時代の道教文学の Chang Zhuo 張鶯（660?-741?）『遊仙窟』からヒントを得て、全世界まで広がっていく、洞窟の中で、心の通い舟に乗って想像上の旅行に出る主人公のように見えます。無我の思想が西鶴の序文の初めに、示唆されています。個人の主体よりも、個人が置かれている周りの世界の方が思索の出発点とされています。例えば、「折ふし時鳥の九声して、夏かとおもふ程に飛び鳴くを、是ぞ詩歌の種にして」いるのは『古今和歌集』の紀貫之の序文が「人の心を種として」いることと逆であり、人間の主体性が微かにされていることを表しています。しかし、作品中、その無我の旅僧は主人公になって、観客者としていろいろな人物に面会してインタビューを行なっている場面と、付き合っている人々の間に交わって、役者の一人になる場面（巻2の5「吹捨の尺八七弦の牢人」）と、完全に主体としての自分の姿が消えて、あるシーンや景色を見まわしてそれを述べることにとどまる場面と、浮かんだり、沈んだりしている場面とが続いています。描写の仕方として、誰が主体、誰が主人公であるかはわからなくなるようにできていますので、誰でもよく、どこへ行くかはわからず、無我の旅行の僧侶にしたようです。西鶴にとって、個人よりも人間の一般的なタイプが重視されています。この著作の目的はあるタイプの心理を描写することにあるので、この序文でも西鷺との会話の記録もなく、著作の中にも全ての人々も自分の名前と呼ばれておらず、描写する作者と描写されている人物も少しずつ、混淆され重なりつつあるという作家の方法が展開されています。この展開は、一方では、西鷺が黄檗宗の出家者なので、彼によく合う形容です。もう一方この作

19 上掲『西鶴新新攷』、380頁。

20 上掲『井原西鶴』、218-219頁、229-230頁。

品からいえることは、西鶴の小説が追求することの一つは人間とは何か、人間の本質はなんであるのかと問うということです。つまり序文の中にある「人ながら、人程替りたるものはなし」ということに一番関心があります。

IV 人間本質の追求

一 吉田兼好の見ぬ友

逆モデルとして雅的な上品さの『源氏物語』を意識して、パロディとして書かれている1682年の処女作の『好色一代男』（巻1「けした所が恋のはじまり」）²¹のなかに人間はばけものだとし西鶴は定義していますし、1685年の『西鶴諸国ばなし』の巻1に、世界の広さに驚いて「世間の広き事国々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」「是をおもふに人はばけもの世にない物はなし」²²と驚いています。1688年の『日本永代蔵』（巻1「初午は乗てくる仕合」）²³の中に「人の人たるが故に、常の人にあらず。」と述べ、1688年の『武家義理物語』の序文では、西鶴は、人間は携わっている職業によって多彩に変貌しているものの、人の心は基本的には変わらないと、人間がその環境、場所、生活事情によって多彩多様な姿を呈していても基本的に同じ本質を有しているところを追求しています。「それ人間の一心万人ともに替れる事なし。長剣させば武士。烏帽子をかづけば神主。黒衣を着すれば出家。鋏を握れば百姓、手斧つかひて職人十露盤をきて商人をあらはせり。その家業面々一大事をしるべし。」²⁴と述べています。それ故に、『好色二代男』の中（巻5の3「死ば諸共の木刀」）に一日親しむ機会のある人を愛せざるには居られない、すなわち、どの人間でも知られるべきと断定して覚悟しています。そのために、未だ会ったことのないどの人でも付き合うべく、知られるべき「見ぬ友」²⁵としています。それは兼好が『徒然草』の第十三段に「ひとり、燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなること多かり。」²⁶という文章から引いています。

また、兼好にとっては人間は皆同一の原理に基いているために同じ本質を宿している筈ですので、一人が他の上にも下にもいるはずがないし、同じ平等性を担っているといいま

21 「或時は若衆出立。姿をかえて。墨染の長袖。又は。たて髪かつら。化物が通るとは。誠に是ぞかし」。額原退蔵、暉峻康隆、野間光辰編『定本西鶴全集』第1巻、中央公論社、1972年7版、28頁。

22 額原退蔵、暉峻康隆、野間光辰編『定本西鶴全集』第3巻、中央公論社、1972年7版、15-16頁。

23 「天道もの言はずして国土に恵みふかし。人は実あつてあつて偽りおほし。其心は本虚にして物に应じて跡なし。是善悪の中に立てすぐなる今の御代を。ゆたかにわたるは人の人たるがゆへに常の人にあらず」。額原退蔵、暉峻康隆、野間光辰編『定本西鶴全集』第7巻、中央公論社、1950年、19頁。

24 額原退蔵、暉峻康隆、野間光辰編『定本西鶴全集』第5巻、中央公論社、1972年6版、19頁。

25 「けふあつて明日は。露も消るに間のあり。稲妻石火。たはこ呑む間も、女良の命程はかなき物はなし。それしやとて。先は見へぬ世の中。一日増りになしめば。人程かはひらしき物はなし」。上掲『定本西鶴全集』第1巻、374頁。

26 安良岡康作『徒然草全注釈』上巻、角川書店、1971年4版、69頁。以下の引用も含め、必要とする箇所を除き、ルビは省略した。

す。『徒然草』の第二百十一段、「万の事は頼むべからず。愚かなる人は、深く物を頼む故に、恨み、怒ることあり。勢ひありとて、頼むべからず。こはき者先ず減ぶ。財多しとて、頼むべからず。時の間に失ひ易し。才ありとて、頼むべからず。孔子も時に遇はず。徳ありとて、頼むべからず。顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず。誅を受ける事速かなり。奴従へりとて、頼むべからず。背き走る事あり。人の志をも頼むべからず。必ず変ず。約をも頼むべからず。信ある事少なし。

身をも人をも頼まざれば、是なる時は喜び、非なる時は恨みず。左右広ければ、障らず、前後遠ければ、塞がらず。狭き時は拉げ碎く。心を用ゐる事少しきにして厳しき時は、物に逆ひ、争ひて破る。緩くして柔かなるときは、一毛も損ぜず。

人は天地の靈なり。天地は限る所なし。人の性、何ぞ異ならん。寛大にして極まらざる時は、喜怒これに障らずして、物のために煩はず。』²⁷という哲学的な前提と考え方は西鶴のグループに受け継がれています。

上で引用した言葉は、西鶴の人間発見への関心と人間主義的な態度を表しています。『近代艶隠者』と同年(1686)に出版されている『一代女』の中に、『近代艶隠者』に類似した考え方があります。それは、汚れた世の中に生きていても本来清浄なる本心に従えば、自分の精神が何の乱れもない状態に戻り、自分の人生に関して冷静な目でものを見れば、どんなに動揺が起きても、自分自身をマスターしている限り、何の妨げもなく生きていられます。浮世の中に混じり汚れながら、清い水の流れのように自分の身を保ち(巻5、「石垣の恋くづれ」)²⁸、また、臨終の時でも自分の本来の清浄な心に戻した上で安心して最後を遂げられる。「死は時節にまかせ今迄の虚偽本心にかえつて仏の道に入とす、め殊勝におもひ込」²⁹と言います(巻6、「皆思謂の五百羅漢」)。すなわち、どんな状態にいても自分の心を穢さないようにしていると、『一代女』の主人公が告白しています。源氏物語の女性達の覚悟の感情性を受けながら、この話では、長く自分のことを話して、懺悔物語を展開した挙句、心は汚れた世の中によって濁らされなくなったと結論しています。(巻6、「皆思謂の五百羅漢」)³⁰西鶴の小説のドラマの種と筋は文字通りに冒険 adventure の集積の語りではなくて、むしろ、どういうふうに、どういう方法で、人間が解放でき疎外からの解脱が得られるのかを課題にしています。言い換えれば、汚れた状態から清浄な状態へ辿る道と方法を主題にして、主人公の話し言葉を通じて、細やかに語っています。『一代女』の結論は死ぬ事は時間次第で、今まで、自分の中に迷いに迷って間違っていた

27 安良岡康作『徒然草全注釈』下巻、角川書店、1968年、368-369頁。

28 「うき世に濁りて水の流るゝごとく身を持」という。額原退蔵、暉峻康隆、野間光辰編『定本西鶴全集』第2巻、中央公論社、1972年4版、331頁。

29 同書、372頁。

30 「みじかき世とは覚えて長物語のよしなや。よしよし是も懺悔に身の曇り晴て。心の月の清く春の夜の慰み人。吾は一代女なれば何をか隠して益なしと。胸の蓮華ひらけてしばむまでの身の事。たとへ流れを立たればとて心は濁りぬべきや」とまた、告白している。同書、372-373頁。

事は本心に戻り、仏の命に貫いて通じていくというのです。これは、ある意味で、老荘思想と仏教から得られ、表現されている西鶴の人生観であります。

二 毎日の職業

その意味しているのは、戦争と叛乱の時代の中に、勝利者側の人は急に上の方へ上がり、負けた人たちは昔、分限者であったのに、今は乞食の状態まで落ちているという時代であったから、人間の本质は誰にでも同じでありながら、極端な姿、形を表していると驚くべく見えるので、西鶴は人ながら、人程替りたるものはなしといいます。彼の目的は日本中を旅行して、人間のすべての姿を記録することにはありましたが、自分が大阪を出られなかったのも、西鶴の代わりにその役割を果たしたのが、西鷺でありました。弟子の北條団水（1663-1771）が書いた西鶴仮託の『西鶴織留』（巻3の4「何にても知恵の振売」）の中で、『莊子』の「秋水篇」が引用され、人間がどんなに小さな者であるのかを意識した上で、人間は大海の無限さに向けて大自然に大きく動揺させられていますから、執念深く、正義に、何の諦めもなく生存するために天理に従って自分の職業に携わらなければならない³¹ということが述べられています。これが、西鶴の見た社会に対しての判断でもあるし、西鶴自身の考えをも間接的にうまく表しているのです。『近代艶隠者』に先立って、少し前の時代に、町人でも無駄に豊富なものを貯めてはいけないという倫理思想も流行り、それを描写していた浅井了意（1612-1691）が『堪忍記』（1659年刊、1664年京都版、1671年江戸版）の中に小作人、大工、商人、農民のような低い身分の人達は先づ毎日、何の利益も目指さないで、職業をしてから余分なものを捨て自分の楽しみを味わう寛永（1624-1644）の時代に鴨川のほとりで貧乏生活をしていた熊千代と駒千代の話を語っています（巻4第14、第15）³²が、『近代艶隠者』（巻4の2）の「酒楽の鉄男」で語られる、一日の労賃で酒を呑む、鉄を肩に掛けた男の話とあい通する考え方です。

三 日本の広さの発見

西鷺は全国の地方から西鶴の情報集めの役割を果たしており、西鶴に自分の作文はどれだけよくできたのかを批評されるべきだと思い、自分の師に見せたかったでしょう。情報集めの上では、西鷺の業績は大きかったに違いありません。ちょうど、この小説が書かれた時期に、外国、特にヨーロッパの発見と同時に、日本の海岸に沿って日本国の正確な地図が作られるという日本の発見もありました。海運、土木事業の商人であった河村瑞賢

31 「大海の底に尾閼という穴あり。諸川の水日々夜日々夜に入れども彼穴のうちに失するがゆへに増事さらになし。人間ひとつの口あり此尾閼のごとし。一生のうち朝夕喰物がぎりもなし。見過は八百八品をそれぞれにそなはりし家職に油断する事なかれ。今時は正直をもつて其身の骨をくだけば。天理に叶ひそれぞれの渡世いたさぬといふことなし」。上掲『定本西鶴全集』第7巻、380頁。

32 万治2年（1659）、荒木利兵衛開板、矢口丹波記念文庫蔵本による。

(1617-1699)は1671年に、東にも西にも、磯乗りで日本海岸の海路を開いて、どんなに世界が広いかという意識を日本人特に大阪の町人に目覚めさせました。同年出版の『五人女』も、中央の文化的大都会の京都と地方との関係と交流を背景にしている作品です。『近代艶隠者』の序文で、西鶴は、西鷺とたまさかに逢い、「語るにつきず、聞くに世間の広ひ事ぞかし」と賛嘆しています。瑞賢は同郷の芭蕉とも交流し、隠者の一人である黄檗宗の鉄牛（同書巻4の4）とも友人であったことは特筆すべきです。僧侶の姿を帯びていた西鷺は、世俗の人々よりも自由に国々の関を通過して、日本の地方、国と国が回れたという恵まれた立場でもありました。西鷺の注目を引いたのが、自然世界の四季は変わらないが、「思ひの外なるは、世を深く忍び、遠くのがれて、陰徳の有人、風流男女にかぎらず、名を埋みて住しを、其の国其の里に見しに、境界殊勝におもはれ、あらましに書うつして、土産に込込み簞たる物を明くれば、名所紙のあるにまかせて、かさね捨てられしを取り集めて見るに、何れか楽しみを極め、世にうとからぬとはしられ侍る。おろかなる我。たのしみの種にもなりぬべし」と（同書序文）ということで、西鶴は西鷺の作品の因縁と事情を紹介しています。

四 「やさ」の概念

ここでいう、「やさおとこ、おんな」（風流男女）は職業、社会地位などを逃れた人物であり、階級システムから外れている遊民として自由に生き、自分の幸せの理想に従って生活の仕方を求めようとしています。西川如見（1648-1724）の『町人囊』の中に、芸能人達は遊民と呼ばれて、士農工商の社会制度の下におかれました。そのために、『近代艶隠者』の中に出ている音楽の演奏者達、琴、三味線、箏、尺八、四つ竹、笙、笛などの演奏者は特殊な意味の隠遁者、市中の隠遁者ともされています。中でも、尺八を吹く人物は当時、浪人であった元武士で、幕府としては反乱や一揆を起こすことを恐れて無理に静かにさせるために彼らに尺八を吹かせて、下手でも無理に、市民に御布施を上げる義務を負わせます。

また、歌人としていきな生かたを過ごし、ものごとを本心から思い、和歌を詠んで、人と人、男と女の間に、慎み深く、優しく、しとやかで、繊細的な関係を重んじ³³、貧乏さの中にも、豊富さの中にも同じく数寄者の清福、虚清な生き方と上品で優雅な趣味が優れている人物たちはやさと形容されています³⁴。元々の意味は優れたことを行なった人に対してどんなに小さいものであるのかを意識した上で、恥ずかしく思うことを表現した形容

33 兼好が『徒然草』の第三段に言う「万にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうごうしく、玉の卮（さかづき）の當なき心地ぞすべき。露霜にしはたれて、所さだめずまどひ歩き、親の諫め、世の謗りをつゝ、むに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ、さるは、独り寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとして、ひたすらにたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。」（上掲『徒然草全注釈』上巻、31頁）に当たる。

詞です。しかし、「華麗」という意味合いも含んでおり、「やさしく花なる歌」について鴨長明作の『瑩玉集』は「姿詞花麗をさきとして、とをく世の塵をはなれたり」³⁵といい、歌は花麗を先とすることを述べています。また、鴨長明は「すがたに花麗きはまりぬれば、又おのづから余情となる」³⁶とも『無名抄』の中で言っています。要するに、九鬼周造が分析した粹³⁷とはほぼ同義語です。心の中に思うこと、内面的な体験の豊かさが外の姿に現れて、内外ともやさしさが溢れています。

やさの反対語は量的にもものを集めている趣味です。兼好はそういう態度を厳しく批判しています。『徒然草』の第三十八段に「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ。

財多ければ、身を守るにまどし。害を買ひ、累を招く媒（なかだち）なり。身の後には金（こがね）をして北斗を柱ふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。大きな車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、うたて、愚かなりとぞ見るべき。金は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり。

埋もれぬ名をながき世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ、位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚かにつたなき人も、家に生れ、時に逢へば、高き位に昇り、奢を極むるもあり。いみじかりし賢人・聖人、みづから賤しき位に居り、時に逢はずしてやみぬる、また多し。偏に高き官・位（つかさ・くらゐ）を望むも、次に愚かなり。

智恵と心とこそ、世に勝れたる譽も残さまほしきを、つらつら思へば、譽を愛するは、人の聞きをよろこぶなり。譽むる人、毀る人、共に世に留まらず。伝へ聞かん人、またまたすみやかに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られんことを願はん。譽はまた毀りの本なり。身の後の名、残りでさらに益なし。これを願ふも、次に愚かなり。

但し、強ひて智を求め、賢を願ふ人のために言はば、知恵出では偽りあり、才能は煩惱の増長せるなり。伝へて聞き、学びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可・不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か伝へん。これ、徳を隠し、愚を守るにあらず。本より、賢愚・得失の境にをらざればなり。

34 田中巳榮子は「艶し」の西鶴の用例として、「顔うるはしく生れつき艶しきを」（『好色一代男』巻4の5「昼のつり狐」）といった女性の姿・容貌が美しい女性を描く場面での用例、「みづから賤しきかたちながらそれぞれの勤もあれば傾城屋に身を売事はとふにそ。心ざし艶しくいづれの道にも親達のためなればとて」（『本朝二十不孝』巻1の2「大節季にない袖の雨」）といった心づかいの細やかさを描く用例を挙げている。田中巳榮子「近世初期俳諧における「やさし」の用法—『江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶し」について—」、『國文學』第95号、関西大学国文学会、2015年、74頁。

35 大曾根章介、久保田淳編『鴨長明全集』、貴重本刊行会、2000年、402頁。

36 同書、82頁。

37 九鬼周造は、「いき」の内包的構造について、異性に対する「媚態」、「意気」即ち「意気地」、「諦め」という三つの徴表を論じている。九鬼周造『「いき」の構造』、岩波書店、1967年改版、18-36頁。

迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくの如し。万事は皆非なり。言ふに足らず、願ふに足らず。」³⁸と言います。

『五人女』（巻1の1「恋は闇夜を昼の国」）で、「むかし男をうつし絵にも増り其さまうるはしく」の「むかし男」³⁹が在原業平（825-880）を指していて、「切せし黒髪は大綱になはせける是にはりんき深き女もつなかるべし」⁴⁰という言葉が、『徒然草』第九段「女の髪すぢを繕れる綱には、大象もよく繋がれ」⁴¹によっているように、やさのモデルは、古くは『伊勢物語』の在原業平や『源氏物語』の光源氏を通じて、近くは「双ヶ岡の優法師」の吉田兼好の考え方を明らかに汲んでいます。『近代艶隠者』の「艶」は、西鶴自身が西鷺の著作に付け加えた形容詞だと評論家、専門家が認めています。⁴²それは国の政治の経営を考えている儒者よりも道教の理想に従うものであり、それに仏教思想もかなりの程度貫いています。

V 人物のタイプとその境界

一 尺八の虚無僧

『近代艶隠者』の中の浪人（巻2の5）は遊民の典型であり、武士でありながら、禪宗の袈裟を着させられて、托鉢させられているので、下手なのに皆は幕府の指令に背かないように御布施を施します。尺八の演奏者が上手になるのは、十八世紀の後半からですがその時から、普化宗として認められます。普化宗は明恵と道元の開山とされている西方寺の跡に、由良の興国寺が虚無僧の総本山であったのが、十三世紀の後半に道元の弟子の心地覚心が中国から無門慧開の禪宗を輸入した時に黄檗宗の尺八を吹いている僧侶と一緒に帰国したと伝えられています。⁴³それ以来虚無僧は、興国寺から全国に広まったといわれていますが、実際は普化宗が輸入されたのは十七世紀であって、広まったのは江戸後期からです。『艶隠者』が下手な音楽家を描写していることは歴史的な事実を反映している貴重な証拠になっています。それは「諸国執行の心さしありて、尺八の僧と成つつ、見なれぬ国々里を脚にまかせ風にしたがひて、さすらひありきしに […] 家々の軒下に一曲をしらべて施物を請けず吹捨てにして通る。その楽しみ人しらぬそら笑ひして行（ゆく）に」（巻2の5）という記述に表れており、自分でも下手なのがわかっていて、横に頭を振

38 上掲『徒然草全注釈』上巻、183-188頁。

39 上掲『定本西鶴全集』第2巻、115頁、および頭注を参照。

40 同書、115頁、および頭注を参照。

41 上掲『徒然草全注釈』上巻、51頁。

42 上掲『井原西鶴』、174頁。

43 山本守秀解註『虚鐸伝記』、楽文堂、1925年の「尺八の由来」において、遊学中の学心が、普化禪師の鐸音から虚鐸を為した張伯の孫、張参から虚鐸を学び、本朝に帰船し、弟子の寄竹に虚鐸の音を伝えたとされている（同書1-2頁）。学心は一寺を紀州に造立し、号して西方寺といい、終に此に住す（1頁）と述べられているので、学心は覚心とみられるが、武田鏡村は、覚心が、虚無僧たちからの教義のより所とした普化の思想とも、尺八による吹起修行というものとも、まったく無縁であったといってもよいだろう、と述べている。武田鏡村『虚無僧：聖と俗の異形者たち』、三一書房、1997年、118頁。

るって施物を下さなくてもよく⁴⁴知足の加減がわかっている私は全てを捨てた自分の幸せを知っていると満足した顔で旅行を続けています。武士、僧侶、芸能人であり異人と形容されている虚無僧は創始者の半分以上伝説的なロマンを思わせ、尺八の袋の中に、刀が隠れていることを恐れていた国民の怖さが上手に描かれています。モデルになっている一翁（?-1646）は関西の虚無僧の総本山である京都の明暗寺の僧侶で寛永時代に福岡の円通寺に行ってから博多で九州の虚無僧の総本山として普門山の一朝軒を開山しています。一朝軒から筑前、筑後、豊後、肥前まで虚無僧達は旅に出て、茶の湯など、色々な芸術に携わっていたことは西鷺が忠実に事実を映しています。「武芸の達人、後には筑前の福岡に住しが、常に馬を好んで愛し、朝は釜の沸（たぎ）りにたのしんで、禅単工夫を凝らし、世を送りし異人也」（巻2の5）と一翁に相応しい描写です。虚無僧の話し相手の七弦の浪人は、やはり妻子を亡くしており、曹洞宗の心越（1639-1695）か心越の弟子の人見竹同（1620-1688）あるいは数人の人物を合わせたイメージを思わせ、儒者の象徴である七弦を引いている同じく浪人の異人です。しかし、悲しむべきなのに、琴を演奏するに楽しんでいる場面は「かかる時しも、その間杵に隔たる屋の奥に、七弦の箏に感声を凝らす音しけり。此愁いの中にいか成る事にかと。其所を求め見れば、むかふに生死事大の額掛けて、四十斗（ばかり）の男、椅子に寄りかかりて遊ぶにて有りし。いと異なる人かなと思ひて、かく哀傷の中に、いか成る人なれば、楽しげにと言うに、なを弾じやまず。我問うていふ。乾坤打破せん時、何れの所にむかひ、瑟琴せん。答て打破せん時爾にいはん。即今打破すいかん只箏問答おはりて異人箏をさし置てさればとよ死たる者は我妻子也。人として生死をなげかぬはなけれど、強いて悔やむは愚成也既に變じて生じ。變じて死すは變の常たり。變何をかおどろかん明日は起き夕べは臥す。是常の變たり。永臥永起るは生死の變たり。覚めて後變たる事をしらん。然れば覚る人にむかひて、我、何をか嘆かんと云に此生を以ては他生を破らぬ事を語りて帰し。此男こそ江府に聞こへし七弦の翁たるべし」（巻2の5）と描写され、『莊子』の「至楽編」中に莊子が妻の死を知った時に、歌ったり、打楽器を鳴らして、舞ったりして、全てのものは變じていて本無生である⁴⁵、と述べられているような一種の自然主義の哲学の説明を反映しています。当時の禅思想と老莊思想を合わせた特異な考え方です。

二 鉄牛と社会事業的な商業

『近代艶隠者』巻4の4「目簞の翁」（目次に「生死の海魚」という見出しがついている）に登場する和尚は、鉄眼の弟子の黄檗宗の鉄牛道機（1628-1700）を指しています。

44 虚無僧の暗黙の規則で縦に頭を振るうと上手なのでいらっしゃいという意味のサインで、横に頭を振るうと下手で、聴きに來なくてもいいと言うサインである。

45 市川安司、遠藤哲夫『新釈漢文大系8 莊子 下』、明治書院、2002年38版、492頁。

小田原の山にある足柄郡の紹太禅寺は小田原城主の稲葉正則によって立てられ、1669年、河村瑞賢が手伝って鉄牛により膨大なスケールで開山されました。西鷲が訪れた時には、阿弥陀仏を本尊にして、鉄牛の阿弥陀絵もあって、富士山も箱根の山も見えて、48軒の建物もありました。紹太禅寺の勢力を恐れていた幕府は、寺を越後山城へ移そうとしましたが、その政策が鉄牛と稲葉正則の反抗運動で頓挫し、小田原に残っています。一方では鉄牛は黄檗宗を日本に輸入した隠元とその弟子の黙庵、鉄眼、即非、提宗等と一緒に、幕府の下で黄檗版一切経、萬福寺の成立、全国での社会事業に携わっています。長崎から大阪と京都の満福寺をへて陸奥まで全国を回った鉄牛は、1676年に富士郡の瑞林寺の住職であったため、いつでも西鷲に会えました。二人の会話は典型的な禅宗問答です。「唐作りの寺に参詣て和尚に謁し退て問。いかなるか西来意。答えて己變生を（語）悟（さと）りて見よと斗。その後は尋べき力もなくして。御法のふかき道など聞きつつ肝をかたふけ、実[まこと=信?]をおこし身の愚なる事憂ふる[…]」（巻4の4）と言いますが、ここでは正三が言い出した「自己變生」と類似する「己變生」の考え方も表し、また、仏教的な意味での信実の心、信仰心と、儒教的な意味での誠実な心を唱えている鉄牛の考え方が表現されています。社会事業を行っていた鉄牛の問答のすぐ後、鉄牛の理想を実現したかのような目簞の翁が出てきます。籠の中にいさを運んで売っている老人が余分の魚を皆人にくれて自宅に帰る場面が展開しています。その理由を尋ねると、「此者こそ常常儲くる分限を極め、朝よりゆふべにおよべども、其かぎりをうらざれば帰らず。たとへ一時にも定まる分を商ば、重て売るといふ事なし。その日は一日夫婦ともに遊びて暮らしぬ。扱、あしたに成ると是より遙かの浜辺に出て、魚買て来たる。婦は一日の人仕事取て是を業とし、其の値をとりて酒に替て夫を待つ。夫婦れば二人頭をかたふけて飲みぬ。朝夕の饗けとてもいやしき麦の飯などに暮らす。隣家親しけれども一生米錢を借りず。人また用をいへば衣に替てもあたふ。おかしき男」（巻4の4）と言う売買、連帯の精神、人生知足の態度の原理を語っている場面ですが、恐らく黄檗宗の鉄牛の社会事業の精神を生かしている異人の話でしょう。また、「只春秋夏冬に相当る魚鳥を日毎に、商て暮らす。いまだ一日も飢る事なし。是天道のあたへとうれしく、自然と商所（うるところ）の余慶を種として今日迄はくるしむことなしと語るに。また問ふ、自然の余慶を以って糧となさば、売る余所の物を何ゆへ人に施すやといへば。おとこ笑つてけふの身天是を生かす。しかれば、生くる所の身を以って食を求む。明日また天より身を生かさば、その身をもつて食をもとめん。死なば求めじ。此ゆへにけふの糧をもつて、明日の糧となす事しらず。今日の糧足ぬれば。足らざる人の為に施す。たらざる人をばうへさせて。たりぬる吾にたくはへんやと言。一生徳をつつしみ。ふかく隠れて人に見しらねば、むなくやがて朽ち果てぬらんと斗。」（同所）とあり、余分なものを人に与えるのはこの小説に一貫している思想です。

三 難波の歌翁

『近代艶隠者』は、純粹な文学の作品よりも、西鶴風の作文で、西鶴の弟子が師を真似し、師に憧れて、師の姿を追求するというつもりで、同時代の奇々な人物の描写を通じて師のイメージを作り上げようとしています。その中に、特別に下河辺長流という国文学の創始者とも言える人物が難波の歌翁として出て来ます（巻3の5）。「和朝の風俗」という目次の見出しは日本の平安時代の地方と貴族の歌謡、和歌の様式と風体を研究している国学者の思想的な文脈を語っています。挿絵をみますと、長流の前に、僧侶の姿の人物が座っていますから、下河辺長流（1569-1649）と弟子の契沖（1640-1701）が登場している場面が描かれているのでしょう。

感受性の溢れる優男女は小説の中に多く出ていますが、長流が紫式部の『源氏物語』を読んでいるというのは時代の流れに乗って、象徴的に人間の情けの優先性を表しています。仏教思想の中において、感情性は悟りと解脱の妨げとされていますが、但しそれを一番認めているのが古代から日本仏教に浸透している密教でありますので、長流の一番弟子が真言密教の僧侶であるのも不思議はありません。挿絵の中に、黒い袈裟を着ている人物は契沖ではないかと想像します。また、「我彼人に問ふ。いかなるゆへにか市中に有りながら、家より外にも出で給はず、かく引籠ましますにか。又、さもあらばいかなる山陰にも隠れたまはぬなどいへば、世をはなれては住里なしとばかり答へて、何のいらへもなし。」（巻3の5）という答えは、本当の隠遁者は外側の隠遁の性質を帯びず、普通の人間のように生活していますから、町の中で自分の職業を行なって生きていますが、隠遁の意思と態度は内面的な心の持ち方に表現されています。また、「かさねて、問う。歌はいかなる物ぞや。翁、答えて、我も知らずと。」（同所）という答えは、歌は客観的な把握物ではなくて、意識的な作用から外れている境界でありますので、直感的な領域に属していると言いたいのでしょう。「また、問ふ。足下には何をかなしたまふと言に。是に答て、我はつねに四時のうつり替（かわる）をたのしみて、飛花落葉に〔無〕常を觀じ、変化の境をおどろかず。老衰も元天利と明し、貧富の分をわすれて、偶じとして暮らすと。」（同所）というのは、人間が生きていることに驚いて覚悟するという態度は、時間のたつこと、物事の無情性、事情、社会、個人の替わることが人間の根本的な体験でありますから、それに驚かず、ストイックで無動でありながら外側の変わっていくことを認めて、死ぬことや、運が良くなるのも悪くなるのも、忘れて、その日、その瞬間、物事が来るように生きているといえます。「また、問ふ。然ば翁の身のうへに、恋述懷の詠（ながめ）はなさずや。老人答へて、五体則ちこれ法身の都。内に心王をやすんずれば、則真人、本覺法身の都に住む。得る心王は不思議、不思善。其境界より出るは歌也。思慮別知にわたりて、吾なすにはあらず。爰に到りて、伝ふべき道もなく、語るべきかたるもなしと言（いふ）に。和歌の奥義のふかきにおどろきて歸去る。」（同所）という和歌の考え方が述べら

れています。「五体則ちこれ法身の都。内に心王をやすんずれば、則真人、本覚法身の都に住む。得る心王は不思悪、不思善。其境界より出るは歌也。」というような文章の中の本覚法身の都という言い方は『大乘起信論』に由来しており、密教化された形で特に中世芸能の間で使われていた言い回しでしょう。自然と人間世界の現実をそのまま肯定する態度をあらわし、人間の感じているもの、思っているものはすべて受け入れられて和歌や文学の言葉で表現されるべきと言っています。

巻3の5で歌の翁は、自分の人間としての身体的な条件は、実際は悟りの世界そのままであると述懐しています。恋愛を始め人間のすべての感動しているのはことごとく認められていて、善と悪を超えた境界でありますから、道徳的な判断と倫理的な評価からはなれています。そのことは当時、熊沢蕃山のような儒者が『源氏物語』に対して、道徳的な解釈を施していることと逆の態度をとっています。その時代より、契沖から本居宣長まで純粋な感動性の直覚に基づいている国学の思想的姿勢と展開を見事に予想して表現しています。それと同時に、西鶴の思想と相通じていますし、西鷺も師の西鶴を長流のイメージとを重ねて描写しているのは、西鶴自身こそ町人の世界で生きている新しいスタイルの国学の創始者と見ていたためでしょう。

VI 結論

西鶴を褒めていた大阪の俳友達が追悼の句として、

物がたりあまたかかれたる中に、風流なる名をとりて
蘭の香や名は埋れぬ艶隠者 萬海

を書き残しています⁴⁶から、江戸時代の有名な評論家、柳亭種彦（1783-1842）でさえも『近代艶隠者』が西鶴の真作と断定していました。彼の判断が間違った理由は西鶴自身が艶隠者でいましたし、艶隠者と思われていたからです。西鶴は出家者の姿をしていますが、それは浄土宗の信仰があったのか、時宗の信徒であったのか、あるいは禅宗であったのかと色々な説が流れています。しかし、彼の周りの俳友文脈、そして『近代艶隠者』の思想的背景を見てみますと、老荘思想と、難波の歌翁の芸能的解釈の本覚思想と、禅宗的な自己變生の独創的な考えと、懺悔物語の系統からなっています。宗教的な精神よりも幕府から離れた自由主義の思想の持ち主であったと言えます。あまりにも序文がうまく書かれていますから、偽作を思わせるこの作品は、西鶴の本当の面目をあらわにしています。

出家者の袈裟を着ていましたから、地方の国々を自由に行脚できた西鷺が自分の机の前

46 西鶴十三回忌追善集である『西鶴忌歌仙こゝろ葉』における萬海の追善句。上掲『定本西鶴全集』第14巻、野間光辰の解説8-9頁、および上掲『西鶴新新攷』、368頁参照。

から離れられなかった西鶴に世界の広さを具体的に知らせていましたので、師の西鶴は著作三昧に入って出版物を多数出せました。人間の本質を追求できて、その姿の多様性をあらわにしたのが西鶴の著作集です。町人、士農工商にわたった目だけでなく、世間から外れている遊民の人物達についても、町人の社会にしかありえなかった新しいタイプの隠遁者の生活の仕方と思想を描写することに成功しました。西鶴は最初の著作で『源氏物語』を意識して町人の世界に当てはめた人間感情を描写しましたが、その思想背景は師を崇拝していた弟子が書いた『近代艶隠者』によって明確になっています。それと同時に、当時の社会を思想的にも歴史的にも照らしてくれます。

本書は、当時の社会生活、経済的生活を知る上で貴重な歴史的な書物であり、思想的には、道教、仏教、儒教の哲学を多く取り入れ、思想的、歴史的な価値が高く、西鶴の小説、詩的世界、思想的世界を理解するためには非常に重要な著作といえます。

(本稿は、2017年12月16日開催された、東洋大学東洋学研究所の、井上円了記念研究助成・大型研究特別支援助成による研究「日本文化の背景となる仏教文化の研究」の公開講演会の講演原稿をあらためたものである。)

キーワード：『近代艶隠者』、井原西鶴、西鶯軒橋泉、隠遁、「やさ」